
迷子

鬼琥珀

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子

【Nコード】

N9726P

【作者名】

鬼琥珀

【あらすじ】

気が付いたら森の中に1人・・・

誰か俺にこの状況教えてくれーーーorz

（前書き）

読み専のズブのド素人がなんとなく書いたものです。

軽くスルーしてくれると喜びます（けして、DMではごぞいませんであしからず）

突然だが俺は死んだ。

理由？知るわけないだろうっ

自分の名前と死んだ理由だけをすっぱりと覚えていないのだからただ、俺は死んだんだと漠然とした想いがあるだけ。

此処は何処で、俺は誰で、何でこんな森の中に居るのか・・・

「何でだよ」

周りに誰もいないのだから問いの答えが返ってくるはずはなく。

「・・・はあ。」

こう言うときは普通もつと感情的になつて暴れまわるとかするんだと思つてたけど、俺、意外と冷静じゃね？

「誰かあ居ませんか？」

暇だから叫んでみたり・・・

返事は来ないだろうな『誰ですか？！』

あんねえ・・・誰かいたよ。

回りを見渡してみる。

誰もいない幻聴が聴こえるとか冷静じゃねーなあパニックになりすぎて、驚きすら越えたかつ！

『ちよつと〱無視しないでよ。そつちが先に話し掛けてきたくせに』また聴こえる・・・。回りを見わ（略・・・誰もない。

『私を驚かせておいて、無視ですか、そうですか。もう良いよ。ひつく・・・うう・・・えーん・・・ズズズ・・・良いんだもん。わ、わたし、むしさ、れても、なかない、もん・・・うう・・・』

・・・泣いてるやんかあああああ！！！！？

「落ち着け。大丈夫だ無視してないからつ姿が見えないから幻聴だと思つてただけだから。だから、泣きやんでくれないか？ついでに

姿を表して欲しいんだが。」

自分で何言ってるのかすらわからねえ。

しかも、フォローになってないし

『ほんと？無視されてない。？あなた、私が見えないの？目の前にいるのに？』

「・・・は？目の前？」

『うん！ほらほら』

目の前には木がはえていて（森だから当然だけどな）その木の枝には、何故か妖精のような人形がある（なんか動いてるし・・・）アレではないだろう。

うん。現実逃避しながらその人形をみていると

『そんなに見つめられると恥ずかしいよお』とか言ってる。つて、はいいいい。キタコレ！！！

「マジッスか。それだけはないと信じてたのに。俺の信頼を返せー
ー！！！」

『え？え？ご、ごめんなさい。えっと、あの・・・うう。』

ヤベ、また泣きそうになってる。

仕方ないなあ

「おい、そのちっこいの。お前何者？」

必殺 話題チェンジ！！

『ちっこいの、ちっこいの、ちっこいの、ちっこいの、ちっこいの、
・・・』

地雷を踏んだようだ。

「おい、戻ってこーい。」

こんなんで、戻って来るわけない『ハッ』キョロキョロ。
戻ってきた・・・だ、と。

しかも回りを見渡してる姿は可愛いじゃねーかチクショー！！

『あの、貴方は誰ですか？』

・・・俺の質問はスルーでるね？分かります。

「はあ」

俺が溜め息をつくときちつこいのは何故かビビってた。

笑えるんですけど。」

「俺が誰かしりたければ、先ずはお前が先に名乗れよ。」

「えっと私はフェアリー族のリーフェン・フェア・・・コホン、フエン・サライスです。フエンって呼んでください」

コイツ、フエンは偽名でリーフェンが本名だな。

分かりやすいやつまあ、良いか

「わ、私が名乗ったのですから貴方も名乗ってください。」

コイツ素直そうだから、からかうと面白いだろうなあ

「偽名でも名乗ったことにするんだ。」クスクス

フエンのやつが驚いてる。

気付かれてないと思ってたのか。

「まあ、良い。俺は・・・たぶん人間で名前は覚えていない」

「え？」

フエンの驚いた顔はシャメ撮って友達に回したらみんな笑いころげるだろうな・・・。

「あの、冗談ですよね？」

「いや、マジだ」

フエンの問いかけに即答した。

自分でも胡散臭いと思うが真実なのだから仕方がない。

フエンは驚きすぎて固まっている。

つか、フエンってめっちゃ可愛い顔してんなあこれで人間サイズだったら俺口説くんだけど・・・妖精サイズはちょっときついな。色々。

「り・い・どこにっ！！・わ・」

ん？近くに人間がきてる。

しかも鎧や剣のような金属音もしてるから武装集団かなにかか。

どうやら誰か探してるっぽいな。

声の雰囲気からして敵を探してる気がする。

穏やかじゃないな。

見付かると色々面倒そうだし隠れるか。

フェンはまだ固まっているからとりあえずつかんで、人のいない方へと走る。

フェンが何か言ってる気がする。

「静かに」

見付かりたくないからフェンに一言言つて、口を塞ぎ走る。

武装集団？からかなりの距離を離れた所にきたのは良いが、フェンが・・・

切株の上で怒ってるフェンも可愛いry・・・ゲフンゲフンッ。

俺はただの変態ではない。変態と言う名の紳士です（キラーン

『いきなり酷いです！！こんな人気のない所に連れてきて、私をどうする木ですか！！？実験体？解剖？臍目的ですね！！良い人の振りをして騙したんですね！ひっく。・・・うう・グスン・・・う・・・』

・・・泣かせたい訳じゃないんだけどなあ。

臍目的ってなんつーことを。

それに会った時から人気なんかなかっただろ。と心の中でツツコミを入れる。

「・・・」

俺は無表情でフェンをみていた。

小さいけどとても可愛い少女？に上目ずかいで見られて緩みそうになる頬を引き締めるのに必死だ。しかも涙目

『っ！そんなに睨んでも怖くなんかないんですからね！』

睨んでないのに……。ちよつと振り回してみるか

『え？なんで掴むの？！はーなーしいてええ』

掴んだだけでもこんなにうるさいとは。だが断る！

「フェン、うるさい。振り回されなくなったら静かにしてくれ。

あと、俺は実験するつもりも騙したつもりも睨んでるつもりもない。

」

『……。本当に？怒ってる顔じゃないの？』

ああ、そこ突っ込むのか。

「怒ってる方が良いのか？少なくとも今はまだ怒ってはいない」

『本当に？絶対？嘘つかない？』

「ああ」

そんなに俺の言葉は信じられないのか。まあいい

「信じられないなら信じなくて良い、どちらでも俺は困らない。」

『信じるよっ！貴方を信じる。だからこんな所で一人にしないでね？ね？』

「一人にされたら困るのは俺の方なんだが。」

『そうなの？』

「ああ、記憶がないからどこに行けば良いのかすら分からないからな。とりあえず。リーフェン、俺に名前をくれないか？」

『名前を？……。っ！ちよつと待って、今なんていったの！！』

リーフェンが慌ててる理由は分かってるがあえて間違える。

つか、気付くの遅っ！

「名前をくれないか？」

『その前っ』

「どこに行けば良いのかすら分からない」

『違っー！私のことをなんて呼んだの！！！？』

やっぱりな。本気ではれてないと思ってたのか。

「リーフェン。」

『っ！なんで・・・』

「フェンが最初に言ってた」

『言い直したじゃない！フェン・バーミラって。』

「・・・リーフェン。間違ってるぞ《フェン・サライス》って名乗っただろ！それに偽名だってバレバレって言ってただろ」

俺はそつと溜め息をつき、フェンを見つめるが、うつ向いていてどんな顔をしているか見えない。

『私はフェンだもん。リーフェンじゃないもん。』

フェンはマジ泣き一歩手前って感じの小さな声で呟いた。

「フェン？なんでリーフェンじゃ駄目なんだ？」

フェンはうつ向いて、声を殺して泣いていた。

「・・・もう、これ以上は聞かないから。此処には俺しかいないから、声を殺して泣かないでくれ。声を出して全て吐き出してしまえ」
両手でフェンの小さなからだを優しく包み込みそつと胸に抱き寄せ
る。

フェンは大きな声で泣き始めた。

気になるが聞かないと言った以上は仕方ないフェンが話してくれるまで待つか。

今はただ。「おやすみ、リーフェン。よい夢を」

俺はフェンを胸に抱き木にもたれて眠りについた。

「知らない天井だ・・・って森の中だけだな。」

俺はフェンを起こさないように呟いた。朝日が昇るより早くに起き
ちまった・・・大体5時頃か。

昨日のは、夢じゃないんだよな。

リーフェンのやつ幸せそうに寝やがって可愛いな襲っちゃおうかな・

・ハッ俺はロリじゃない!!

それにフェンは妖精、掌サイズナイナイ。

危ない危ない。危うくケモノゲフンゲフン。トンデモナイヤツラの仲間入りするところだったぜ。

チャポンッ

水の音？フェンが起きる前に顔でも洗うか地面に直に奥のは可哀想か。仕方ない。

着ていた上着を脱ぎフェンをのせる。

『んっ・んんっ・うん・・・すーすー』

あはは、マジ可愛い

かけてやった上着を体に巻きつけて寝やすい体勢にしたようだ

「ちよっと行つてくるな？」

寝てるから意味はないけど一言いつてから水音のするほうに歩いていく

歩いてから15分位のところそこには、小さいけれど綺麗な泉があった。

「自然の泉って感じのとこだな。人工ではありえない美しさがある」

俺は自然と感嘆の声をあげた。

フェンが起きたら連れてくるか。

とりあえず、顔洗って戻らないとな。

一人にしとくのは色々と心配だしそんなことを考えながら泉に手を入れ顔を洗った。

「ふう、冷たくて気持ちいいな。

さて、戻る・・・『いやあああああ!!!!!!どこ行っちゃったの?!』っ?!リーフェン？」

俺は急いでリーフェンのもとへ走った。

リーフェンは泣き叫び俺を探していた

「リーフェン どうしたっ！大丈夫っ！！？」

俺をみつけたリーフェンがいきなり顔面ダイブ・・・

『うわあああん、置いていかれちゃったとおもったよお！！どこに言っただの。帰って来てくれて良かったあ 一人にしないでよお。起きたら貴方いなくて怖かったんだからあ・うう・えーん・』

「悪かったよ、水の音が聞こえたから顔を洗いに行ってたんだ」

『なら、起こしてくれても良いじゃない。そしたら怖い思いをしなかったのに。』

「幸せそうに寝てたから起こせなかったんだ。今度から気を付けるから泣きやんでくれないか？俺はリーフェンを置いてなんか行かないから。な？許してくれ」

『うう。今回だけなんだからね。次に同じことしたら許さないんだから。あと、私はフェンなんだから！リーフェンじゃないんだから』

「ああ、悪い。フェン これで良いか？」

『ううう〜。』

複雑そうな顔をして唸るリーフェン。

一体俺にどうしろってんだよ。

「フェン、とりあえず顔から離れてくれないか？」

そう言いながら掌をさしだすと、フェンは素直に顔から離れ掌に移動した。

俺は、放り出されている上着を拾いそれでフェンの顔を拭いてやる

「よし、顔洗いに泉まで行くとするか」

『・・・うん』

俺はフエンを手に乗せたまま泉の方へ歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9726p/>

迷子

2011年1月8日23時38分発行